カンボジアの教育を通して学んだこと

文学部英語英米文学科 3 年
竹中沙李

私は今回、カンボジアで 4 歳〜6 歳・小学校低学年向けの英語塾を運営している Wonderfy という日系企業で約一か月間のインターンシップを行いました。主な活動は、公立小学校に設置されている JDLC（Japan Digital Learning Center）で、2〜5 年生が対象のパソコンの授業のサポートをすることでした。この活動は、Wonderfy と JICA（国際協力機構）が提携して行っているものです。最初の数日は、一日二コマ程度メインティーチャーをしました。メインティーチャーとしては、教壇に立ち Word の機能の使い方を説明し、その後生徒が実践するという流れの進行を行いました。それ以降は、理解できていない生徒や授業についていけない生徒のサポート役（アシスタント）として、授業に参加しました。また、現段階では先生が教えることを真似るだけのインプットメインの授業が多いというところで、アウトプットの多い双方向授業、生徒が楽しんで参加できる授業にするための活動も行いました。例えば、写真の挿入の機能を学ぶ授業では、生徒と一緒に学校内で好きな写真を撮りそれを後の授業で利用してもらう、というような活動です。さらに、十人十色の答えが出るような、ワードとエクセルのエクササイズブックを作るということも並行して行っていました。

今回、カンボジアでのインターンシップに参加した目的としては、発展途上国の教育の現状や日本との教育の違いについて学ぶこと、そして、現地の人やインターン先の人など、様々な人と積極的かつ主体的にコミュニケーションを取り、異文化理解を深めることでした。

まず、教育の現状として、今回行った小学校では、生徒皆が受けられるパソコンの授業が一週間に一回 20 分と非常に短く、二人で一つのパソコンを使うこともありました。しかし、実際他の小学校ではパソコンすらなく、紙に書くだけの授業をしており、授業全体のシステムに関しても、先生不足の為に午前と午後の二部制に分かれているという教育の機会の少なさも学びました。この点では、能力がそれぞれ異なる子ども達に、等しく学びを提供することの難しさを強く感じました。しかし、まずは子どもたちが学びに興味を持ち、楽しく学習できるように働きかけることが大切なのであり、限られた時間・環境の中で出来ることをするということが重要なのだと気づきました。

次に、コミュニケーションについてですが、授業は基本的にクメール語で行われ、生徒も皆が英語を話せるわけではなく、そしてインターン先でも英語を上手に話す方があまり居なかったこともあり、コミュニケーションを取るのに苦労しました。はじめは英語が通じないと自分の気持ちを伝えることを諦めることもありました。しかし、翻訳機を使ったり簡単な単語に言い換えたり、多角的なアプローチを通して生徒や職場の方と意思疎通することが出来るようになりました。今回、言語は分からずとも積極的に交流することで何を伝えよ

うとしているのかを汲み取ることができると学びました。その甲斐あって、次第に子どもたちが私を見て手を振ったり話しかけてくれたり、道端で「Teacher!」と声をかけてくれたときは、頑張ってよかったと感じました。

また、今回の経験を通して、私はクリティカルな見方や考え方が身に着いたと思います。はじめは、職場の人に自分の考えを自信もって提案できなかったのですが、授業中の生徒の様子を見たり、エクササイズブックの作成を通して、次第に目的意識を持つようになりました。そして、課題点や解決策を見つけることができるようになると自分の意見や考えを伝えられるようになりました。責任感や目的意識をもって仕事をすることで、言われたことや既に行われていることに対してただ受け入れるのではなく、何が不足しているのか、どうすれば改善できるか、と多様な角度から検討し、客観的に考えられるようになったと感じました。

今回、何事も経験しないと学びは無いと実感するインターンでした。今後、もっと沢山の人と交流し、沢山のことを経験し、クリティカルに考え能動的に行動し、そして目標をもって行動していきたいです。そして、コミュニケーションのツールとしての英語をもっと磨いていきたいと思います。

▼生徒の理解度に合わせて授業を進めた

▼一人一人の様子を見ながら授業のサポートをした。